

学内広報

2020.12.21

no.1541

東京大学 ダイバーシティ調査

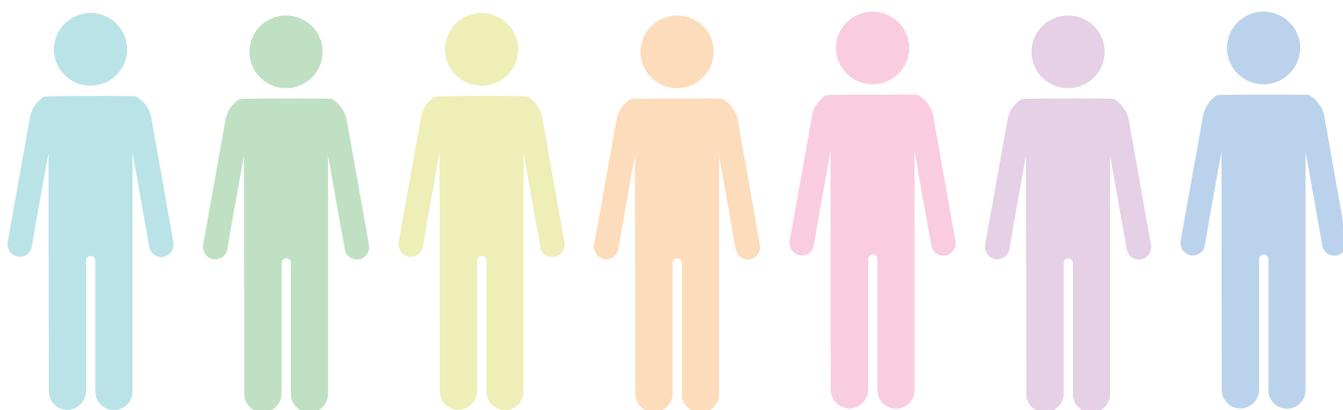
2020/12/15 - 2021/1/13

Survey on Awareness and Status
of Diversity at The University of Tokyo

すきま時間に完了!

東京大学に在籍する全学生、全教職員対象
For All Students, Faculty, and Staff

あなたの声が多様性のある
キャンパスづくりに役立ちます!



事務局

本部ダイバーシティ推進課

diversity-prom.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

QRコードでアクセス→

日本語

学生用

教職員用



English

Students

Faculty
and Staff



志ある卓越。



グローバル・コモنزの管理責任とは?

Tokyo Forum 2020 Online

学生が旧車をレストアして大会に出るものづくりの授業

海外ヒストリックラリー参戦プロジェクト

Tokyo Forum 2020 Online

グローバル・コモンズの管理責任とは？

12月3日～4日、Tokyo Forum 2020 Onlineが開催されました。今回のテーマは「人新世における人類共有の地球環境、グローバル・コモンズの管理責任」。世界各地から研究者、政策決定者、経営者、CSOらがオンラインで集合しました。3日に行われたハイレベル特別対話で展開された内容を抽出して紹介します。



ウォーレイ●ジュネーブからこんにちは。地球環境危機は、大きなリスクである一方で大きなチャンスでもあります。ゼロエミッションを実現すれば10兆ドルの経済価値が生じると言われます。ただ、グローバル・コモンズに共鳴しない人も、COVID-19が転換を遅らせる要因になると考える人もいます。まず科学の面から現在の状況を解説していただきましょう。

科学者1万人が緊急事態と警告

ロックストロム●現在、私たちは変化が不可逆になるかどうかの転換点にいます。300万年の間、気温変動の幅は2度を越えませんでした。直近の氷期から現在の気温は1.2度上昇しています。これが何よりの証拠です。地球には変動を吸収して安定化させる力があり、これまで気温変動を狭い幅に収めてきましたが、その能力は急激に失われつつあります。

私たちは緊急事態に直面している。1.1万人もの科学者がそう警告しています。史上初めて、科学的観点から地球の緊急

事態を宣言できる状況です。地球システムの安定性が脅かされ、我々は全ての地球システムを安定させるための管理者になる必要がある。グローバル・コモンズは、公海や氷床や宇宙空間だけではなく、私たちが依存する陸と海の大きな生物物理学的システムのすべてです。

地球環境に影響を及ぼす15の重要要素のうち9つが臨界点にあります。アマゾンの熱帯雨林、南極の氷床、大西洋の海洋循環……。各々は相互につながり、事態はカスケード的に進みます。プラネタリー・バウンダリーの考えに基づく目標設定が必要です。投資、産業、エネルギー、食料システムも含めて統合されたガバナンスを適用し、管理される状況にしなければいけません。

ウォ●2015年パリ協定の立役者、フィゲレスさん、現在の状況は？

2030年以降は制御が不能に

フィゲレス●私たちはまだ将来への影響力を駆使できる立場にあります。勝負は

ここから十年。手をつけられるのは2030年まで。以降は制御不能になるので、何をやるかはあまり意味がなくなります。いま意思決定ができる私たちが未来を手中にしている。この十年が全てを決めます。

私たちが正しい方向を向いているのは確かです。たとえば金融界では、危機を理解し、方向転換をして価値毀損のリスクを受け入れつつあります。世界の多くの銀行が化石燃料をポートフォリオから外し、資本市場はよりクリーンなテクノロジーに移行しつつある。18の国の中央銀行が気候ストレステストを実施しているのは金融市場がリスクを理解し始めたことの一つの証左です。企業に目を向ければ、1000社以上が2050年までにゼロカーボンを実現する運動に賛同し、1200社の企業が14兆ドルの投資をクリーンな経済へ移行しています。ここ1～2年、世界的企業が2050年より前にカーボンニュートラルをと言っています。脱炭素の取組みは重荷ではなく、イノベーションとよい財務パフォーマンスをもた

初日には、五神真総長と韓国SKグループのCHEY Tae-Won会長による開
会挨拶に続き、コロンビア大学のJeffrey Sachs教授と気候変動に関する
政府間パネル議長のLEE Hoesungさんが基調講演。ハイレベル特別対話
の後、パネル「Covid-19はグローバル・コモンズに大変革をもたらすか？」
を行いました。2日目には、「グローバル・コモンズの管理責任を促す枠組
みと指標の開発への挑戦」「グローバル・コモンズの管理責任の実践と
は?」「グローバル・コモンズの責任ある管理のために、データは何がで
きるか?」という3つのパネルを実施した後、2日間のMCを担当したジャー
ナリストの国谷裕子さんのリードにより、日韓の6人の学生たちが、2
日間の議論を見て学び感じたことを、東京とソウルからそれぞれ報告。自
分の学業や日常生活に議論を役立てようという思いが緊張感とともに伝わ
ってくる好セッションとなり、フォーラムに瑞々しい輝きを添えました。



らす、という意識に変化しています。

グローバル・コモンズを守るためには、
マインドセットを変えることです。ブレ
ーキだけでなくアクセルを踏む。持続的
な開発のサポートは同時に自然のサポ
ートでもあり、それが生存と成長のため
に最高だという認識を持つことです。

地政学的に見ると、この1年で大きな
変化が生まれました。中国、日本、韓国、
コロンビア、南アが脱炭素化の宣言をし、
アメリカも大統領選挙の結果を受けてそ
の列に入ります。昨年、脱炭素を謳う国
は世界の25%程度でしたが、来年には
60-70%の国が気候に関して責任ある目
標を持つ。気候変動への影響も変わるか
もしれません。直近の報告では、今世紀
末の気温は産業革命前から2.1度の上昇
になりそうです。パリ協定の前は4~6
度と言われていたのが下がり、いい兆候
です。方向性は正しい。ただ、スケール
とスピードが足りないのが課題です。

ウォ●ビジネスリーダーとしてこのアジ
ェンダを長年推進してきたポールマンさ
んは今の状況をどう見ますか？

産学官協働が制度転換の鍵

ポールマン●我々は間違いなく困難な状
況にあります。グローバリズムは期待し
たほど機能せず、集団として必要な変化
を実現できていません。COVID-19や
気候変動、様々な災害が教えるのは、貧
しい人が常に犠牲になることです。行動
しないことのコストは行動するコストを
上回ります。そこに大きなビジネスチャン
スが生まれると気づいた企業は長く繁
栄し、気づかない企業は滅びるでしょう。

共通の善のためのパートナーシップが
必要ですが、全体に資することを自分の
利益の前に置くシステムへの変換は、一
つの企業ではできません。市民社会や企
業が政府と手を組んでいけば、枠組みを
つくる取組みはもっと早く進みます。実
は、コロナ禍の中で、ESGに熱心な企
業はパフォーマンスがよいのです。危機
の中でも回復力がある。金融市場はそう
した企業への投資を増やしています。こ
こがまさに転換点です。

ウォ●続いてエチオピアからお話した
できます。コロナ禍によってアフリカへ
の開発援助も減っているようですね。

アジアとアフリカが互いに貢献

ソンウェ●エリアに限定されない真の多
国間協力が必要です。アジアとアフリカ
は互いをいかに補完することができるの
か。たとえば、アフリカを走る車は皆ア
ジアの車ですが、多くは中古車で多量の
CO₂を排出しています。生産拠点をア
フリカに移せば、輸送コストが減り、中
古車が排出するガスも減るでしょう。ア
フリカでは2300万人の女性が呼吸器の疾
病で苦しんでいます。これは新しい調
理器の普及で解決できるかもしれません。
同時に森林伐採の防止効果も期待でき
るでしょう。我々が手にしているのはスケ
ールの大きな実験の可能性です。

それにはお金が必要です。日本では資
金の借り入れコストが非常に低い。グ
リーンエコノミーを志向する民間の資金が
11兆ドルあるとも聞きます。連携して
リスクを減らしながらアフリカのイン
フラに投資できないでしょうか。雇用の面

でも債務のサステナビリティでもアジア
とアフリカは互いに貢献できます。13
億人を擁するアフリカ市場を活用すれば
持続可能な形で経済を回しながらネット
ゼロを実現する道が見えてくるはずで
す。ウォ●さて、グローバル・コモンズ・セ
ンターはどうアジェンダを進めますか？

足りないピースを集めて発信

石井●地球環境に関するナラティブはこ
こ一年で劇的に変わりました。以前は明
るいトーンで人々を勇気づけるものでし
たが、それが変わってきました。「2050
年に持続可能にするには後10年しかな
い、2030年以降はコントロールを失う」
というメッセージを重く受け止める必要
があります。

私は東京で大きな責任を感じています。
ネットゼロの姿勢を日韓の指導者が示
しましたが、具体的にどうしたら到達で
きるのか、消費者も企業も不安に感じ
ているでしょう。具体的な進み方が見え
ないとコミットメントは実現に近づき
ません。私たちのセンターはそうした足
りないピースを埋めようとしています。
ロックストロム先生のシナリオをベー
スにコモンズの管理についての努力度
を指標化し、個々の政府や企業の意思
決定を助けます。マルチステークホル
ダー間の提携があって初めて膠着状
況から脱出できる。そうした重要な要
素を私たちが取りまとめることでス
ピードとスケールを達成できると考
えています。

ウォ●科学者、政府、民間、そして各
国間をつなぐ活動が石井さんの手で進
むことに私はワクワクしています。

旧車のレストアから渉外活動まで学生が行うものづくりの授業とは？

海外ヒストリック ラリープロジェクト!!



Charade (ジェスチャーによる言葉当て遊び) からの連想で「?」を重ねたチームロゴ。名作『幸福の黄色いハンカチ』のイメージもこめられています



9月、広報課に一人の学生さんからメールが届きました。旧車によるラリー参戦を通じてのものづくりの技術を体得しながら主体性を養うことを目的とした授業についてぜひ取材してほしいとのこと。文面の背後に熱意と切迫感を見た広報課員は、工学部8号館のガレージにお邪魔しリーダーに話を聞きました。コロナ禍の逆風に耐えながら、彼らの直列3気筒エンジンは一心に動き続けています。



①②本郷構内を移動するダイハツシャレードクーペ。色はチームウェアと同じサフランイエローです。③10月1日に行った一般学生向けの試乗企画「ラリーカーに乗りろ!」で使われた「レビンちゃん」ことトヨタカローラレビンTE27。④チーム一心のメン

バー。後列左端はプロジェクトの生みの親・草加浩平先生(ラリー界の重鎮)。⑤昨年度のチーム浪漫が参加した第23回ラリー・モンテカルロ・ヒストリックにて。車は日産チェリーでした。⑥10月24日に長野県南佐久郡で開催された第39回八ヶ峰ラ

リーに参戦したチーム一心は、チャレンジクラスで見事優勝。⑦工学部8号館の「実験室」で溶接作業に取り組むメンバー。ロールケージを溶接したつもりで草加先生に見せたら全然ついていないことが判明して1からやり直したこともあったそう。

機械制御だから訓練になる

――旧車を修理してラリーに出る授業？

はい。動かない車をレストアし、ラリー仕様の車両にして大会に出るんです。例年2月にモナコで行われるラリー・モンテカルロ・ヒストリックを目指しています。世界ラリー選手権の第1戦の直後に同じコースで行われる旧車対象のラリーです。過去に過去にラリー・モンテカルロに出場経験がある車種を使う決まりで、単位が出る授業としては3年と修士1年を対象です。例年15人以上いますが、今年はコロナ禍の活動制限で周知も難しく、9人だけです。工学部の授業ですが他学部も参加でき、理学部や農学部の仲間もいます。

――車好きの学生が集まっているの？

元自動車部も一人いますが、多くは海外に行きたいと思って参加したようで、自分もそうです。去年8月にオートマ限定の免許を取りましたがたまにレンタカーに乗る程度。マニュアル車を移動する必要があり、追加で限定を解除しました。授業をとらなかつたらオートマのままでしたね。

――旧車とはどういう車でしょうか？

簡単にいえば、機械制御の車です。現代の車は点火のタイミングなどを全部電子制御していますが、コンピュータはブラックボックスのようなもので、不具合があっても普通は直せません。機械制御なら原因を突き止めて修理することができます。自分たちでどうにかできるところのものづくり教育の意義がある、と考えた草加浩平先生がプロジェクトを始め、今年が11期目です。

――ラリーでは速さを競うんですね？

ヒストリックラリーは指定区間を指定さ

れた速度で走る競技です。速すぎても遅すぎてもダメ。距離や時間は大会によって異なりますが、ラリー・モンテカルロ・ヒストリックでは5日間で3000kmほど走ります。夜通し走る最終日にはフランスのチュリニ峠でみんなで車を応援するのが常です。

先輩からの引き継ぎは禁止！

――それはさぞ盛り上がるでしょうね！

プロジェクトは1年で全てリセットされ、先輩からの引き継ぎが禁止なので、実際の様子は知らないんです。渉外部門は企業に迷惑がかかるので別ですが、その他部門（ロジスティクス、ものづくり、ウェブ、広報、デザイン）は全部引き継ぎ禁止です。過去の様子は報告書で知るのみ。毎年「モンテカルロって何？」から始まります。今年度はコロナ禍でさらに手探りの状態です。例年、実験室での作業を6月には始めていましたが、今年はやっと9月から。それまでは部品を触ったこともなく、何をしているのかわからない状態でした。

――0からのスタートは大変そうですね。

企業の方には「東大生なのにそんなこともわからないの」とよく言われますね。たとえば、ホイールの作り方には鍛造と鍛造があって、強度を高めるには鍛造がよく、細かいデザインを施すには鍛造のほうがいいが、技術が高い会社は鍛造でもそれができる、なんてことも全然知らなかったの。

――活動資金はどうしていますか？

企業から協賛金を集めて年間1500万円の活動費に充てています。渡航費と約2週間の宿代は自己負担です。海外遠征は課外活動ですがどうせなら行きたいですからね。15万円ほどバイトで稼ぐ必要があります。

――ホンダ学園とのコラボ授業ですね？

はい。整備士を養成する学校の彼らは不動車を車検に

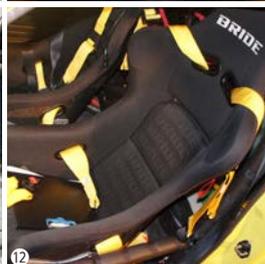
通して走れる状態にするまでを担当します。その後、ラリー仕様にしたたり、渉外や船積みをするのが東大側の任務です。今回の車両は10月頭に車検に通り、10月下旬に出た長野の大会で、出場は3台でしたがクラス優勝を果たしました。旧車の大会ではなく本来は不利ですが、前日が雨で道から転落する車も出るほど滑りやすく、他車のリタイヤが重なりました。

――大会に向けて準備は順調ですか？

実は10月末にモナコ行きを諦めました。コロナの状況を見ながらギリギリまで判断を延ばす手もありましたが、早く決めないと荷造りの苦勞が無駄になる。苦渋の決断でした。渡航制限が厳しくない国の大会も検討しましたが、それも難しく、今年度は国内大会への参戦に切り替えました。候補は2月のRally of Tsumagoiと3月の新城ラリーです。日本全国の協賛企業やお世話になった皆様のところをラリー車で回る計画も検討中です。協賛については海外ラリーの力が大きく、日本の大学チームが出ると注目されるからこそという面があります。国内大会だと注目度が減り、協賛金の減額や撤退もありえます。そんな焦りもあって、何かできることはないかと広報課にメールを書きました。ゴールが見えず、がんばっても報われないかもという気持ちもあります。コロナ禍のなか、私たちのようにもがきながら粛々と活動が続けている学生がいることを知ってもらえればと思います。



TEAM ISSHIN リーダー
森 映樹さん(工学部3年)



⑧実験室の様子。モンテカルロ行きの船に積むためにパッキングした部品や工具など、約400の荷で埋め尽くされています。⑨磨き上げたエンジンは40年以上前の車とは思えないほどきれい。⑩17人の精鋭が揃ったホンダ学園ホンダテクニカルカレッジ関東チーム。見事に車検を通しました。⑪塗装前のシャレード。プロジェクト終了後は提供者のOBIに返却予定。⑫ラリー車両では乗員を守るためにロールオーバーや6点式シートベルトやバケットシートが必須。助手席の足元には消火器も。⑬タイヤ交換の訓練に励む副リーダーの相澤さん。「部品集めから始まる長時間の作業をした後、ラリーで車が元気に走る姿を見て、愛着が湧いてきました」



海と希望の学校 in 三陸

第11回

三陸を舞台に、岩手県大槌町にある大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターと、社会科学研究所とがタッグを組んで行う地域連携プロジェクト—海をベースに三陸各地の地域アイデンティティを再構築し、地域に希望を育む人材を育成するという文理融合型の取り組み—です。3年目を迎えたわれわれの活動や地域の取り組みなどを紹介します。

遂に僕たちは『海と希望』という名の列車に乗った

北川貴士  大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター 准教授

鵜住居駅のプラットフォームに入線した三陸鉄道レトロ調車両 (36-R3)

「海と希望の学校 in 三陸」の目玉イベントのひとつで2020年2月に開催する予定であった「海と希望の学校 on 三鉄」(以下三鉄イベント)を、三陸鉄道(三鉄)が台風19号の被害を受けた関係で延期せざるをえなくなったこと(第5回no.1529)、そしてその後、復旧工事が進められ、今年3月三鉄が運行を再開し再び全線開通したことを(第8回no.1535)ここでお伝えしてきました。今年度は三鉄イベントを開催できるよう準備を進めてきて、去る10月17日、ようやく開催に漕ぎつけることができました。



実をいうと、この三鉄イベントは2021年2月に本開催をする予定で、この日はそのためのリハーサルを行うことになっていました。ところが、国際沿岸海洋研究センターと協定を結んでいる宮古市立重茂中の3年生が、新型コロナウイルス感染拡大の影響で関東への修学旅行に行くことができなくなり、急遽「思い出づくり」に3年生13人と引率の先生に乗りさせていただくことになりました。リハーサルがいきなりぶつっけ本番になったというわけです。三鉄で「海の学習列車」を走らせる初の試みということもあり、お忙しい中、三鉄・中村一郎社長も乗車してくださいました。レトロ調車両1両に、関係者のほか、メディアも6社乗り込んでのぎやかなイベントになりました。

釜石市・鵜住居(うのすまい) 駅を出

大漁旗によるお見送り(鵜住居駅)



発し、約60キロ離れた宮古市・田老(たろう) 駅までを約4時間かけて往復し、道中、ワカメを題材に三陸の海の豊かさを知ってもらう講義や、生徒が学校ですめている地域学習のアドバイスを行いました。家が漁業を営んでいる生徒が多く、ワカメをテーマにしても彼らには当たり前すぎてつまらないのではと思ったのですが、「湯通しするとワカメがきれいな緑色に変色するメカニズムを初めて知った」「重茂で当たり前のことが、都会の人には新鮮だと分かった。重茂を盛り上げる方法を考えたい」といった感想を話してくれました。なかにはメディアに「ディズニーランドに行くよりも良かった」とコメントしてくれた生徒もいました。生徒は車窓からの三陸の秋の景色

も楽しんでくれていたようです。沿道から列車に手を振ってくれる方々も多くいらっしゃいました。

講義では講師のマイク音が列車音でかき消されたり、昼食で注文した弁当につゆたぶりのそばが入っていて空き箱の回収が大変だったり、いろいろ改善点はみつけましたが、なんとか終わることができました。都心を走る列車ではダイヤの関係など様々な問題があり、60キロを4時間もかけて往復するなんてことは簡単なことではないと思います。今後も『ここにしかない学習列車』を走らせることで、人や物を運ぶだけではない地方鉄道のあり方のようなものを三鉄が発信する、そのお手伝いができたらと思っています。



福田秀樹准教授(国際沿岸海洋研究センター)による海洋学の講義

レトロ調車両に掲げられた「海と希望の学校 in 三陸」ヘッドマーク(田老駅)



「海と希望の学校 in 三陸」動画を公開中→YouTube サイトで「海と希望」と検索!

制作: 大気海洋研究所広報室(内線: 66430)



総長室だより 第29回

～ 思いを伝える生声コラム～

東京大学第30代総長

五神 真



GABで育んだ国際的なネットワーク

11月12日と13日の二日に分けてオンラインでUTokyo Global Advisory Board (GAB) Meetingを開催しました。GABは小宮山宏元総長のもと、2006年に始まったプレジデント・カウンシル(PC)を発展させたものです。東大の応援団を世界に拡げることを目的としていたPCは私の総長就任後、一回休会を経て、2016年に最終回を開催。翌17年、総長室の正式な組織として規則に定め、グローバルな視点で議論し、助言を頂く年次開催の会合としてGABを開始しました。

第1回では、ジェンダーの話題が議論されました。東大の女子学生比率の低さは、世界の“普通”から見ると、不健康だ、放置すべきではないというのです。数値目標の可否の議論は白熱しました。第2回では、2019年にスタートすべく準備を進めていた、東京カレッジの構想について議論頂きました。名前をどうするかで盛り上がり、東京カレッジという名称に至りました。昨年の第3回では、グローバル・コモنز・センターの設立につながる有意義な助言を沢山頂きました。

今年の第4回は、私の総長任期の終了にあわせ、GABも最終回として開催しました。メンバーの皆さんからは、GABでアドバイスしたことが、東京カレッジ、東京フォーラム、グローバル・コモنز・センターのように次々に実現していることが素晴らしいと評価して頂きました。オンラインでの開催となり、直接お目にかかれなかったのは残念でしたが、画面にメンバーの顔が映った瞬間、旧知の友人らと会ったような感覚を覚えました。メンバーの皆さんも同じように感じて頂いたようです。回を重ね、真剣な議論を交わしたメンバーとの間の連帯感のようなものを実感しました。GABを通じて、東京大学を支援する国際的なネットワークが構築されたのです。

今年1月にダボス会議に参加するためにスイスに出張した際に、GABメンバーのビル・エモットさんの勧めで、ロンドンに立ち寄りました。エモットさんのアレンジで、英国の教育界の方々との意見交換や、ジャパンソサエティでの講演を行いました。総長として進めてきた東大改革について、海外からどのように見えるのかを知る大変貴重な機会となりました。

分断が加速している今の国際社会において、普遍的な価値を追求するアカデミアの活動は、分断を乗り越え世界を繋ぐ力を生み出すものです。その役割は今後いっそう重要になっていくでしょう。

UTokyo 第23回 バリアフリー最前線!



熊谷晋一郎室長が
取材原稿で伝える
障害研究の現場⑩



スピードを速めたキャンパスが 置き去りにするもの

小さい頃から忘れ物が多く、よく怒られていた。そんな川瀬氏を母親は「私の子だから」とおおらかに育てた。一方で、小学生の頃から人と話をするのが大好きで、保健室で消毒してあげるなど人の世話を焼くことも好きだった。

相談支援研究開発センター
川瀬英理 助教の巻



人に接する仕事をしたいと10年ほど看護師として勤務、その後「患者さんとより深い関わりを持ちたい」と臨床心理学の大学院に入った。卒業後は心理士として各地で勤務。10年前に、発達障害傾向のある学生を支援するコミュニケーションサポートルーム(CSR)が本学に立ち上げられた際、自身の発達障害傾向を自覚していた氏は興味を持ち、そこで心理士として勤務してきた。

CSRでは、発達障害をカテゴリではなくスペクトラムで捉えている。つまり診断の有無にこだわらず、大学に入ると周囲からの要求水準が高まるコミュニケーションやスケジュール管理などの領域で苦勞を抱える学生の相談にのり、ToDoリストを一緒に作ったり、心理検査をしたり、保健センターへの紹介や教員への配慮要請をしたりする。面接試験の相談など、就職活動まで伴走することもある。オンライン授業と事前資料配布が主流となり、社交不安症や板書に苦しさをもつ学生にとって授業は楽になる一方、プレッシャーが少なく集中しにくくなるADHD傾向の学生もいるという。

発達障害という概念が人口に膾炙するようになり、一番多い主訴は具体的な苦勞ではなく、「自分が発達障害か調べてほしい」というものになった。その背景には、「学生に何を期待するか」という要求水準の変化があるだろう。氏は、保健センターの知能検査に関する調査を参照しつつ、タスクをこなすスピードの速さがかつて以上に求められるようになったことが一因ではないかとみる。特に教育経験豊富な教員に比べ、若くて優秀だが教育経験は少ない教員の場合、悪気はなくても学生の気持ちを想像しにくいこともある。教員同士のスーパービジョン体制は重要だ。

素早く業績を出せる学生だけではなく、時間はかかるが粘り強く自分のペースで学ぶ学生が認められる環境が必要——そう語る川瀬氏の実践から、発達障害への注目が高まる現代が何を失ってしまったのかについて学ぶべき点は多い。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

ワタシのオシゴト 第175回

RELAY COLUMN

本部人材育成課 向後七海
職員採用チーム

東大創りの「仲間」を探して



職員採用HPをぜひご覧ください！

チーム名のとおり職員の採用と1・2年目職員の研修を行っており、主に採用業務を担当しています。職員採用試験運営の裏方はもちろん、ある時はプレゼンター（説明会で職場としての東大をPR!）、またある時はカメラマン（採用パンフの写真は当チームが撮影）と、飽きる暇がありません（笑）。

どうしたら東大が面白い職場だと伝えられるだろう？、東大の魅力を感じてもらえるPRって？と、共に東大を創ってくれる「仲間（職員）」探しに日々奮闘しつつも、東大創りの原動力となる「人」の採用にやりがいと責任を感じながら仕事をしています。

せっかくなのでオシゴト以外の話も少しだけ。2020年も12月、雪山が恋しい季節がやってきました。今シーズンこそ、白銀のゲレンデで探しやすくと大好評のミカン色ウェア（↓写真参照）を卒業して、おしゃれなウェアを新調したいなあと思っています。

最後になりますが……読者の皆様、採用広報活動へのご協力をよろしくお願いいたします！



今シーズンは雪山に行けるのやら……

得意ワザ：山頂からの直滑降（スキー）
自分の性格：名前は後ろ向きですが、わりと前向き
次回執筆者のご指名：吉田佳実さん
次回執筆者との関係：大学のかわいい後輩
次回執筆者の紹介：笑顔がキュートなしっかり者

デジタル万華鏡

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

第18回 史料編纂所助教 中村 覚
学術資産アーカイブ化推進室

「デジタル源氏物語」を支える技術



本連載の前号では、総合文化研究科の田村隆先生に、東大本『源氏物語』や研究支援ツール「デジタル源氏物語」についてご紹介いただきました。本号では「デジタル源氏物語」の開発に用いた技術、特にIIIF (International Image Interoperability Framework) と「くずし字OCR」についてご紹介します。

IIIFは、画像へのアクセスを標準化し相互運用性を確保するための国際的な枠組みです。IIIFが定めるAPI (Application Programming Interface) に基づいて画像をやりとりすることで、提供機関を横断した画像利用等が可能となります。この利点を生かし、「デジタル源氏物語」では東京大学に加え、九州大学、国立国会図書館、国文学研究資料館などが公開するIIIF準拠の画像を集約し、オリジナルが残っていない『源氏物語』の現存する写本・版本の比較環境を提供しています。

この環境構築にあたっては、諸本同士の対応関係（共通ナンバーとしての『校異源氏物語』の頁番号）を整備する必要があります。ただし、画像、特にくずし字で書かれている内容の照合には、くずし字の読解を含め、高度な知識が求められます。この課題に対して、ROIS-DS人文学オープンデータ共同利用センターがAI技術を用いて開発している「くずし字OCR」などを活用しています。「くずし字OCR」を用いて画像中の文字列をテキストデータ化し、これらテキスト間の類似度を機械的に算出することで、照合作業の半自動化を実現しています。

デジタル化された学術資産と情報技術の活用により、「デジタル源氏物語」のような研究開発を効率的に進めることが可能になっています。

<https://genji.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/>

インタープリターズ・第160回 バイブル

情報学環／総合文化研究科教授
科学技術インタープリター養成部門

廣野喜幸

パンデミックの科学コミュニケーション

科学コミュニケーションは、パンデミック対策にどのような貢献ができるのだろうか。

20世紀以降、世界で100万人を越す人々が亡くなったパンデミックが何回あったか、ご存じだろうか。スペイン・インフルエンザ（1918年、推定死者数約5000万人、以下同）、アジア・インフルエンザ（1957年、110万人）、香港インフルエンザ（1963年、100万人）、そして新型コロナ・ウィルス（2019年、これまでに110万人）の4回である。100年で4回、つまり平均25年おきに生じていることになる。日本でこそおよそ100年ぶりだが、世界規模で考えれば、パンデミックはそれほどまれな出来事ではない。

感染を抑えたいければ、人々が接する機会を減らせばよい。これまでの経験から、至極当たり前のこの常識を私達はよく知っているはずだ。だが、実行は難しい。オランウータンやキリギリスといった単独で暮らす生物とは異なり、ヒトはそもそも群れて過ごすのを本態とする社会性の生物だからである。

ある状況をリスクが高いと認知し、そうした状況では接触機会を下げるというメカニズムがうまく作用すれば、リスクは調節され、自ず感染者数はさがっていくはずだ。だが、どのような状況をリスクが高いと認知すべきかが判然としない。こうしたとき、日本人はお上がリスクを認知してくれるのを待ちがちになる。また、本来群れる動物であるヒトは、リスクを認知しても、他者と接することでうまく稼働するような既存の社会システムに再び身を委ねたがる。

パンデミックという危機あるいはリスクに対処するのに、RNAワクチンがどうのといった高度な科学知識をもつ必要があるわけではない。高度な科学知識を分かりやすく伝えるタイプの科学技術コミュニケーションは、リスク削減に対し、それほどの出番をもたない。お上がそう認知したからではなく、各自がリスクを適切に認識できるのを促す科学技術コミュニケーション、群れたいという欲求の実現が割に合わないものならば、それを押しとどめてくれるような、知識伝達ではなく、行動をうまくコントロールできるような、これまであまり探究されることはなかった科学技術コミュニケーションが今求められているのだろう。

science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp

蔵出し! 文書館

The University
of Tokyo
Archives



第29回

収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

狐狸と近代学知

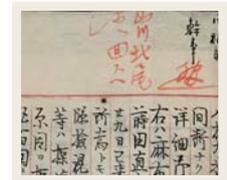


麻布警察署から取り寄せられた石と布切れ

1884年2月
から3月のこ
と、麻布区
広尾に住む
蒔田俊親（通
称：直太郎）
の居宅に、
石や火のつ

いた綿切れが、連日のごとく放り込まれる事件が発生した。静岡県士族の蒔田は、第一回国内勧業博覧会（1877年）で竜紋褒賞を受けた菊池容齋の門人で、絵師として活動するかたわら、近隣の子どもたちに読み書きを教えていた。多い日には石34・火綿13が投げ込まれたが、誰かに恨みでも買ったか、教え子たちに嫌われてでもいたか、事情は明らかではない。巡査の報告書によれば、悪い風聞や色恋沙汰の遺恨もないようで、麻布警察は「狐狸の処業」であろうとした。

東京大学は「学術上参考のため」に警察署から石と綿切れの標本を取り寄せている。これは、東京大学文書館所蔵の『諸向往復 明治十七年分二冊ノ内甲号』（S0004/48）に収録されている。麻布警察からの書簡の余白には、山川健次郎や北尾次郎など東京大学の理学者たちに回すように指示がある。残念ながらこれに続く資料は残っておらず、標本がいかに評価されたかは明らかでない。後年の山川は「千里眼」をめぐる疑似科学論争の中心人物になるが、この事件の調査はその前史と考えられる。



書簡の余白に記された指示

「狐狸の処業」という説明を警察が本当に信じたのか、当事者たちを刺激しないための「方便」だったのか、いまや知る術はない。しかし、「狐狸」の言説が住民の人間関係や生活の意味を説明しうる、ひとつの信念体系の表現であったことは確かだろう。こうした民衆の信念体系に対して、学者たちは学術的知というもうひとつの信念体系をぶつけ、「近代」の有効性を証明しようとした。学者たちがあえて「狐狸」の言説に対抗するのを感じたほどに、民衆の信念体系は強力だったのだ。大学は、「近代」なるものと民衆の信念体系の接触領域でもあったのである。あるいは、事実麻布の山には狐狸の類が棲んでいて、警察官や学者たちもその力で惑わされていたのであろうか。

（助教・宮本隆史）

東京大学文書館 www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles) に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
11月11日	環境安全本部	令和2年度 総長安全衛生パトロール実施される
11月11日	本部広報課	令和2年度文化勲章受章・令和2年秋の紫綬褒章受章
11月11日～12月2日	広報戦略本部、教育学研究科・教育学部、経済学研究科・経済学部、工学系研究科・工学部、情報学環・学際情報学府	日本型の全人的教育カリキュラムを世界に発信 日本の女性の労働力活用が進まない理由を数値化 “誰一人取り残さない”安全な水供給システムを目指して 女性差別を起点に、声を上げられない人たちについて考える / FSI プロジェクトシリーズ 037 ~ 040
11月13日	本部広報課	令和2年度文化功労者顕彰
11月13日	本部広報課	小柴昌俊先生の訃報に接して (総長談話)
11月16日	医学部附属病院	門脇孝名誉教授が欧州糖尿病学会の Claude Bernard Award を受賞
11月16日	本部環境安全課	令和2年度 本部防災訓練実施される
11月16日	理学系研究科・理学部	小柴昌俊特別栄誉教授の訃報に関するお知らせ
11月16日	生産技術研究所	原島文雄 名誉教授が文化功労者に選出
11月17日～12月8日	本部広報課	運動会のオンライン活動ほか 千字で語るコロナ論～医療社会学 武藤香織、教育学 野澤祥子、アジア政治外交史 川島 真、社会学・文化資源学 佐藤健二、人間支援工学 中邑賢龍、デジタルアーカイブ学 渡邊英徳、政治学 宇野重規、哲学 國分功一郎、都市防災学 廣井 悠、数理生物学 大橋 順 キャンパス散歩～奈良時代から続いた鉱山で宇宙と素粒子を観る「神岡の東大」 カナヅチの人は上陸できない!? 西之島での火山観測 / 「淡青」41号「コロナ禍と東大。」より
11月19日	本部人事企画課	「令和2年度東京大学卓越研究員」24名決定
11月24日	工学系研究科・工学部	日本ペイントホールディングスとの社会連携講座の開設
12月1日	広報戦略本部、附属図書館	総合図書館改修工事が完了、アジア研究図書館と共にグランドオープン
12月2日	本部研究倫理推進課	令和2年度研究倫理セミナー 開催報告
12月8日	本部広報課	有馬朗人先生の訃報に接して (総長談話)



CLOSE UP 「新図書館計画」が完了し、グランドオープン式典を開催 (広報戦略本部)



総合図書館本館の大階段の前でテープカットを行った(右から)熊野純彦附属図書館長、五神真総長、藤井輝夫副学長、小野塚知ニアジア研究図書館長

11月26日、総合図書館の別館竣工、本館の改修工事、アジア研究図書館開館を含む「新図書館計画」がすべて完了し、学内関係者によるグランドオープン記念式典が開かれました。

五神真総長は式典の挨拶で、総長就任直後の6年前に改修工事が本格化したこともあり、任期中の様々な出来事の中でも特に印象深いと述べました。一時はミキサー車が一日に数百台も入構し、近隣の道路の混雑や病院の救急車両への影響がないか非常に心配したとも話しました。

10月1日にサービスを開始したアジア研究図書館には、アジア研究のための第一級の学術資料や蔵書が集められ、世界最高水準のアジア研

究環境を提供します。小野塚知二館長はまた、東大図書館の中で唯一研究機能を持つ図書館として、来年度からサブジェクトライブラリアンという専門性を持った図書館員が配置されることを挙げ、将来的にこのような職種が国内に広がっていく第一歩にしたいと述べました。

社会連携や東大基金を担当する藤井輝夫理事・副学長は、長きにわたる国内外からの寄付や蔵書の寄贈が図書館の礎になってきたと述べました。また、図書館内にプロジェクトボックスという大きさの異なる討議・グループ学習用スペースが7室設けられたことに触れ、今後の活用への期待を述べました。

小柴昌俊先生の訃報に接して

本学の卒業生、特別栄誉教授であり、2002年ノーベル物理学賞受賞者である小柴昌俊先生の突然の訃報に接し、深い哀悼の意を表します。

小柴先生は本学理学部教授を長い間にわたって務められ、数々の業績を挙げられました。

特にニュートリノの観測研究では、現在のスーパーカミオカンデの前身であるカミオカンデを1983年に建設され、超新星から飛来するニュートリノを世界で初めて観測し、ニュートリノ天文学という新しい学問分野を切り拓かれました。

小柴先生は、本学を代表する卒業生、研究

者のお一人として、本学の教育研究活動を長期にわたり高いレベルで先導されました。先生の学術への多大なご貢献に感謝申し上げるとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

令和2年11月13日
東京大学総長 五神真



CLOSE UP

令和2年度の研究倫理セミナーを開催

(本部研究倫理推進課)



配信されたセミナーの様相。パネルを受けて、視聴者を交えたディスカッションも行いました

東京大学は、平成26年3月に「研究倫理アクションプラン」を策定し、「研究倫理ウィーク」を定めて、期間中に研究倫理意識の醸成を図る様々な企画を実施してきました。

今年度は、9月28日に、「研究不正が起きる背景とは？～社会的・心理的観点を踏まえ、不正事例から学ぶ～」と題して研究倫理セミナーを開催し、基調講演およびパネルディスカッションを行いました。例年は対面でのセミナーを開催していましたが、今年は新型コロナウイルス

の影響で初のオンライン開催となり、284名の方々にご参加いただきました。

当日は、理化学研究所の桜田一洋氏による基調講演の後、研究倫理推進室員を務めている4先生（岡部繁男、佐藤整尚、平地健吾、関谷直也）を含めて、有信睦弘室長の司会でパネルディスカッションを行いました。議論の様相はUTokyo FOCUSでご確認ください。当日に配信した動画は、後日東大TVにも掲載される予定です。



CLOSE UP

日本ペイントとの協創により社会連携講座を開設

(工学系研究科・工学部)



日本ペイントの田中正明 取締役会長 代表執行役社長 兼 CEO (右) と五神総長

東京大学と日本ペイントホールディングス株式会社（以下「日本ペイント」）は、5月18日に締結した産学協創協定に基づき、10月1日から社会連携講座「革新的コーティング技術の創生」を開設しました。

本講座は工学系研究科に開設され、「抗ウイルス・抗菌機能を有し、感染拡大防止を実現するコーティング技術の研究」「将来予測されるスマート/リモート社会の基盤を支え、社会の

効率性向上に貢献するコーティング技術の研究」「環境負荷低減/社会コスト抑制に貢献するコーティング技術の研究」という3つの方向性で進められています。

多様な学術分野における東京大学の研究成果と、日本ペイントの実用技術開発力を融合させ、塗料・コーティング技術を軸とした共同研究や人材交流を継続し、美しく魅力あふれる持続可能型社会への貢献を目指します。

コロナ禍 vs 東大 Now 新型コロナウイルス情報WG発

*担当理事の下、新型コロナウイルス対策タスクフォースの承認を受けて情報収集・発信に当たっています。

第1回／令和のパンデミック 2020

今年、2020年は、まちがいなく歴史の大きな刻目として人類史に記憶されることになるでしょう。中国から始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の大流行は、世界の光景を変えてしまいました。しかもその衝撃は、なお現在進行形です。これまで『学内広報』では、東京大学がこの“コロナ禍”とどう対峙してきたかを随時レポートしてきましたが、あらためて継続的に現況と取り組みを伝えていこうと思います。

まず、2020年を振り返っておきましょう。令和最初の新年を迎えた1月、東大のアンテナはすでに異変を察知していました。いち早く駒場で、中国からの入・帰国者に対する

2週間の待機指示が出されます。2月末には、事態の急展開を受けて本部に新型コロナウイルス対策タスクフォースが設置され、3月以降、矢継ぎ早に東大としての対応を打ち出していきます。そこで最優先に掲げたのは、学生の安全を守ること、研究・教育の質を維持すること、そして教育を止めないことです。

4月7日には政府による緊急事態宣言に至り、東大も6日に活動制限レベル2、わずか2日後にはレベル3という厳戒態勢に入りました。しかし、これに先んじて授業・業務の全面オンライン化を断行し、学事暦を動かすことなく研究・教育を継続しました。6月以降は、情勢を分析しながら段階的に制限を緩和

東京大学の活動制限指針

0 / グリーン	通常
0.5 / イエロー	一部制限 < 現在 > ◀
1 / オレンジ	制限小
2 / レッドA	制限中
3 / レッドB	制限大
4 / レッドC	構内活動の原則停止

※0-4表示は全学、色分け表示は駒場

し、7月からレベル0.5を維持しています。

この間、第二波、第三波の到来が言われ、ウィズ・コロナ（これは和製英語ですが）は長期戦の覚悟が必要です。感染抑制と研究・教育の両立へ向け、2021年も挑戦は続きます。（杉山清彦／総合文化研究科・広報室副室長）

有馬朗人先生の訃報に接して

有馬朗人先生の突然の訃報に接し、東京大学を代表し、深い哀悼の意を表します。

有馬先生は、原子核物理学が誕生した頃から最近に至るまで、物理学者として多くの輝かしい業績を挙げられました。1989年～1993年には第24代東京大学総長として、大学院重点化や産業界との連携等に取り組み、本学の発展に多大な尽力をされました。

総長退任後は、1998年～1999年に文部大臣も務められ、法人化への変革を推し進められました。

私は、2017年に広報誌『淡青』の企画で有馬先生と対談する機会を得ましたが、私の大学改革の取組みについても有意義な議論を交わさせていただき、多くのご示唆を頂戴したことを鮮明に覚えています。有馬先生には本学地域同窓会連合会会長を務めていただい

ており、一ヵ月ほど前にお会いしたときは、たいへんお元気でいられただけに、驚きにことばを失っております。

有馬先生の、学術及び我が国の教育全体に対する多大なご貢献に感謝申し上げるとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

令和2年12月8日
東京大学総長 五神真



※「学内広報」では広告掲載を受け付けています。出稿を検討したいという皆様のお問い合わせをお待ちしております。↓本部広報課（03・5841・2031）



大統領選挙と大学のデジタル化

20年前にスタンフォード大学で長期在外研究を行い、シリコンバレーのエコシステムを知って以来、主に大規模災害発生時における早期復旧の観点から、折に触れてオンラインキャンパス整備の必要性を訴えてきた。これまでは空理空論、徒手空拳に過ぎなかったが、はしなくも新型コロナウイルスの流行により、想像を遥かに超える規模とスピードで大学のデジタルトランスフォーメーションが進んだ。特にオンライン授業の実施に関して、本部の決断と情報基盤センターや大学総合教育研究センターなど関係者の貢献を称賛したい。

パンデミックを機に大学のデジタル化が進んだのは、どの国や地域も同じ。本学にも、押印を実質廃止したまでは良いが、電子ではない署名が必要だったり、資産管理規定が自宅からのオンライン教育を阻害する部分があったりと、アナログ時代の残滓は少なくない。リアルに戻す／戻さない部分の区分けも重要だが、コロナ禍を触媒として、世界に先駆けた大学の姿を示そうという気概も重要だろう。

例えば、欧米在住の研究者に本学とのクロスアポイントメントを掛けることを想像してみよう。従来は、本学に来てもらうことを原則として、昼間の時間帯を対象に相手機関とエフォート配分交渉をしなければならなかった。しかし、オンラインを前提にすれば、日本の昼間は欧米の夜間。当人が夜更かし又は早起きを良しとさえしてくれれば、相手機関での勤務時間を削らずに本学の教育研究にも従事してもらえる。少なくとも本と筆記用具、改めPCとインターネットがあれば足りる教育研究分野では、上手くすれば欧米内では真似のできないドリームチームを編成できるかもしれない。

20年前の今頃は、ブッシュ対ゴアの大統領選挙が紛糾し、シリコンバレーなのに古色蒼然としたパンチカード式の投票用紙が使われているのを見て、仰天したことを記憶している。またもや奇妙な「選挙」を見ながら、そんなことを考えた。

谷口将紀
(法学政治学研究所)

